

第1回岐阜のつどい 岐阜を知ろう！つながろう！報告

文責 事務局：鈴木隆司

「あぼ兄(に)イの農小を訪ねて」・・・すごい人がいっぱい！！

岐阜の地域を知ろう！つながろう！をテーマに、4月18日第1回岐阜のつどい「中津川椀の湖農業小学校見学・交流会」を行いました。椀の湖の桜は満開のはずが、この日もまだ...つぼみでした。でも、あぼ兄(に)イはじめスタッフの皆さん、山内さん、小林さんその他沢山の人の人たちとあつく交流が出来ました。幸い天候にも恵まれ、春の一日、内容の濃い企画となりました。

【「岐阜のつどい」は、ひろい岐阜県には地域でいろいろがんばっている方が多くいるので、まずは、岐阜の研究センター会員が少人数でもよいから地域を知ることから始めようと地域を調査交流活動として始めた企画です。第2回つどいは、8月18日「石徹白の小水力発電と地域再生」見学交流会を計画しています。別途、案内チラシあり】



4月18日 第1回岐阜つどい

10:30 椀の湖農業小学校校長 安保洋勝さん、スタッフの皆さんと交流

歴史、めざすもの、施設、畑の見学

12:00～ 椀の湖へ移動、昼食 御幣餅、そば(農小の畑で収穫)をいただく。

14:00 終了

あぼ兄イ、スタッフと交流。

畑には子供たちの蒔いた野菜の芽が出ていた。

昼食 五平餅、そば



=訪れた農小でびっくりしたこと=

雑草のない、手入れの行き届いた畑の美しさ。

パワーあふれるあぼ兄イだけではない、周りのスタッフの皆さんのパワーそして仲のよいこと。

農業小学校を卒業した子供たちとの交流が続いていること 第1回の卒業生がスタッフとして参加、運営に協力。経験して感じたことより、農業大学に進学。全国最年少野菜ソムリエ誕生など。

=参加者から出された感想=

「すごい元気なおちゃん達！ここは同じ岐阜県？って感じでした。農業も音楽もいきいきとやってのける人間のすばらしさがあると思う。」

「子供たちに農業の姿、自然の大切さ野菜などの命の尊さ、どんな物でも手間をかけて大切にしないと育たないと感じてもらうのも大切だが、それを守る人がいることが良かった。」

「現地で見学できて良かった。生きる、命の大切さを伝えたい自分たちのできる事から始めたこの農小の取り組み。岐阜県の子供たち、大人たちの参加を望みます。」

「農小には地元の子供たちでなく都会(名古屋方面)の子供がほとんどと聞きました。農作業は地元の子供たちには珍しくないのかな。」「岐阜の子供たちも参加できるとよいね。」

「久しぶりに皆さんと一緒にできて楽しかった。椀の湖のお茶の時代からの付き合いです。そんなかわりを持った人も多かったと思う。」

「丘の上の校舎であぼ兄イと仲間と交流する中で、くらしのために心の支えとなるモノを生み出す恵那教育から、あぼ兄イを中心に、彼を支える仲間とともに喜び、苦しみ、そして疑問を出し合い、気軽に乗り越えていく、お互いの信頼関係が出来ていると思った。」

椈の湖農業小学校について あぼ兄イのお話し

4月18日の見学・交流会に先立って、2月6日、懇談会であぼ兄イにお話を聞きました。

好辛クラブ主宰 椈の湖農業小学校校長の安保洋勝さん

農小の始まり 「フォークジャンボリーとか手作りの活動をしてきた。その延長での農業小学校の活動。今年で19期目になる。自分たちの力で椈の湖そばの土地2haの荒地を開墾して始めた。今で言う『食と農』の先どり、スローフード、郷土食とか言葉があとからついてきた。農業小学校のスローガン『たがやし、ひとなる』という言葉はこの地方の方言だと思っていたら、『ひとなる』という言葉は全国版だった。長崎の人が『ひとなる』という言葉はまだ日常的に使っているのかとびっくりされた。」

農小の1年 めいきん生協のときに下仁田ネギを納めていたつながりから、参加者募集の案内をしている。多くは名古屋の都会の子供たちだそうです。「今は最初とは違う場所で、2haのうち畑



3月25日 入学式での校長挨拶

50aでやっている。小学校一番多いときは114人集まった。この農業小学校の昼ごはんが美味しいから、朝ごはんは食べずにくるという子どももいる。4月には カブトムシの幼虫を確保するのが大変。田植えもおおごと、最初はこんな泥の中気持ち悪いといやがるがやっているうちに、楽しくなってくる。泥遊びは子どもにとって必要なこと。8月は 椈の湖オートキャンプ場を借り切ってキャンプをする。豚の丸焼きが大好評。きれいな川があるので鱒つかみをして焼いて食べる。9月は この地方の名物栗拾いを行う。おやつは栗きんとん。秋には サツマイモをやくのもするが、こどもが『まだか?まだか?』と芋をつついて焼けないので、今は子どもから遠く離れたところで焼い



木で補強した鎌を示して道具の大切さのお話し

ている。」案山子(カカシ)作りも楽しんでやっている。鳥を脅すより何より、人が寄ってきたくなるような案山子を作ろうと去年は50体くらいの案山子ができた。その光景を取った写真がJR東日本のカレンダーに載っている。また、農業小学校の写真は食農写真コンクールにも入選している。」

「稲刈りでは、刃物を持たずのは危険だがやらせる。足踏み脱穀でやる。籾をつかってゴミを吹き飛ばす作業に子供たちはびっくりする。」

「農業小学校は今西祐行さんの絵本を読んだことから始まった。有名なあぼ兄イの『ほら吹き大根』。堆肥をたっぷり入れたら5kgの大根ができた。ジャガイモが木になると思っていた親もいる。」農小のメンバー 「鎌田さんだけが、小学校の校長先生で、後は普通の百姓をやってきた地域の人たち。俳優の川津祐介さんも取



スタッフ紹介 皆さんボランティア

材に来て、土づくりをほめられた。土づくりをほめられることは、百姓にとって一番嬉しいこと。その川津さんが辛いものが好きということがきっかけになり『好辛クラブ』の活動がはじまった。唐辛子は 人間の接着剤になる。『辛い』という感覚は、老若男女みんな同じ。『殻をとかず』ことから親睦が深まる。」

写真は 3月25日 農業小学校 入学式 取材時の様子 普通の学校のように「ああしなさい」「こうしなさい」という指示、指導はしないそうです。子供は走り回って遊んでいました。



第2回岐阜のつどい 岐阜を知ろう!つなごう! 報告 文責 事務局

「石徹白の小水力発電と地域再生」

交流見学会 地域への思い、地域づくりを学ぶ!!

岐阜の地域を知ろう!つなごう!をテーマに、8月18日第2回岐阜のつどい「石徹白の小水力発電と地域再生」見学・交流会を行いました。小水力発電の発電システムをじかに見たり、地域再生のお話しをお聞きしたり、地元のNPOの久保田正則さん、平野章秀さん、その他沢山の人があつて交流ができました。雷が鳴りましたが暑い天候も持ち、夏の日、内容の濃い企画となりました。



くくり姫の会の方たちによる食事を食べながら交流。

【 当日のスケジュール 概要 】

- 午前9時00分 コープぎふ、生協本部 出発
- 11時00分 小水力発電の見学 石徹白での小水力発電を見学。質疑して、交流。
- 12時20分 昼食懇談会
- 13時00分 石徹白での地域づくりについてのお話し
- 14時00分 意見交換終了
- 14時15分 大師堂見学 14時45分 帰路につく。

小水力発電システムを間近に見学・体感。

石徹白の歴史もお聞きする。 太子堂にて



石徹白(いとしろ)って?

白山国立公園の南山麓に位置する標高700メートルにある小さな集落。白山信仰が盛んな平安、鎌倉時代は修験者の出入りで栄えた。「大師堂」にある「虚空像菩薩」は国定重要文化財に指定。主要農産物であるとうもろこしは糖度がとても高く大変好評。冬は3メートルを超える雪が積もり、ウィンタースポーツには絶好のロケーション。厳しい雪国生活が強いられ、過疎・高齢化が進んでいる。

= 石徹白の小水力発電・地域づくりのお話 =

NPO法人安らぎの里石徹白 理事長 久保田正則さん
 NPO法人地域再生機構 副理事長 平野章秀さん より

らせん型水車発電システム(移動型・投げ込み方式)

水の位置エネルギーを使って発電します。発電は(水の量×落差×重力加速度×効率)ですが、たとえばここは一秒間に200リットル、ドラム缶一本分の水が流れています。80~90センチの落差を使って発電をしている。ここにあるのは開放型水車といひまして、タービンにとじこめていく形ではなくて水車が露出をした形のものになります。今ここでは最大800W、通常500W発電して24時間発電しています。トータルにすると同じくらいになります。一般の家庭で平均使用量1ヵ月3004KW、1日10KW、波はあるがほぼ一軒分の発電をします。



発電した電気をためての制御



いったんバッテリーにためて、使っています。これが全部 手作りです。大事なことは、電気の制御をいかに安定的にできるかということ。電圧が変動したらまったく使い物になりません。一番シンプルな格好ということで、直接直流に変換させて、直接バッテリーに入れてあります。今言われているスマートグリッドのような、その小規模版として各家庭で使えるように、せっかく作った電気を漏れなく使えるようにすることを研究する事が一番の課題だと思っています。

上掛け水車発電システム（定着型：バイパス方式）

落差3メートルで発電しています。最大出力2、2KWです。だいたい1700Wくらい、今、1635W発電しています。水が落ちているだけで、最大、家3軒くらいの電気を発電しています。もっと公共に役に立つもので使おうと作りました。この建物は農村加工所で、電気代を気にせずに使えるように作りました。どうもこしの規格外品を使ってパウダーにしてパンとか料理に使う粉にしています。冬場は柿のチップ、みかんのドライフルーツなどの生産にも去年から取り組んでいます。自然エネルギーを取り込んだ6次産業化を、小さいながらもそういう形を私たちは目指しています。



らせん式ピコ水力発電機 ピコピカ

今、水が少ないですが、それでも電気がついています（街燈）。水車の形はらせん式と一緒です。教育現場で電気の起こる仕組みをわかってもらうために、作ってあります。これでも5、6Wは発電しています。12人しかいない小学生が、ドライバーなど工具を使って組み立てました。



= 地域づくり、自分たちのペースで楽しくできることから =

地域の人たちの一番の関心事は人口減少です。昭和30年代には1200人くらい人口がありましたが、今は250人を切るような状況になっています。このままだと集落は消滅してしまうだろうと予想され、そのためにどういうことをしていったらいいのかということで、地元の人たちがNPOを作られました。NPOの活動をやっていく中で、僕ら岐阜のメンバーと知り合う機会がありまして、このマイクロ水力発電の事業が始まりました。2009年に石徹白ビジョンというのを作成し、そのスローガンが「将来にわたっても石徹白小学校を残そう」で、今全校児童が12人なのですが、小学校がなくなると子育て世代が住めなくなるので、一気に衰退が進むだろうということで、清掃登山、文化祭、運動会、いろんな行事が小学校中心に行われています。



地域でいろいろな団体がいろいろな活動をしています。NPOとしては小水力発電の導入、この地域の自然や歴史のガイド、特産品の開発をやり、定住促進に向け、今後、山村留学をやりようと思っております。28歳の稲作農家の方が印刷してTシャツを作っています。くくりひめの会も2年前から地の食材を使ったカフェをやっています。石徹白ファンづくりということで、エコツアー、キャンドルナイト。修学旅行の民泊受け入れ、特産品の開発も加工所で始めています。あとは定住で空き家の情報を提供したりしているという感じですね。

30年後も小学校を残そうという「みんなで楽しくできることから」、なかなかすぐに成果はでなくて、すぐにお金は黒字にならない、やってみるとたいへんですが、みんなでやって、何よりも楽しくがすごく大事です。自分たちのペースで、みんなで楽しくできることからというのも無理をしない形でやっていこうということで、ここ2~3年はやってきました。少しずつ移住する人ができたりしている状況です。

久保田さん（左） 平野さん

ペースで、みんなで楽しくできることからというのも無理をしない形でやっていこうということで、ここ2~3年はやってきました。少しずつ移住する人ができたりしている状況です。

第3回岐阜のつどい 岐阜を知ろう!つなごろう! 報告 文責 事務局

「ぎふいび生活 楽校へ行こう！」

生きる力を養う 中山間地での地域振興を学ぶ！！

岐阜を知ろう!つなごろう!第3回岐阜のつどい「ぎふいび生活楽校へ行こう」が12月8日にラーニングアーバー横蔵・樹庵に岐阜地域懇談会で行ってきました。

平成15年より、横蔵小学校が閉校されるにあたり、「せっかくの文化施設、廃屋として朽ち果てさせず、文化の火を灯し続けられないだろうか。」としてスタート。今ではさまざまな団体とネットワークが広がり、生活楽校もさまざまな活動が行われています。レストラン、そば処、ホールなどがあり、生ハムづくりやそば打ち、草木染め体験教室なども行われています。訪問当日も大阪からこられた方たちを含め、ソフトボールの樹庵杯が行われ、教室を客室にした宿泊所は一杯でした。



「NPO法人ぎふいび生活学校」を立ち上げ、豊かな自主的活動を繰り広げ、中山間地の地域再生をはかる、事務局長の小林さんのお話をうかがうことが出来ました。また、都市と農村のネットワークを広げるためのさまざまな活動の様子や生き生きと暮しておられる、地域の方たちの取り組みの様子を見る事が出来ました。



【 当日のスケジュール 概要 】

- 午前10時00分 樹庵(ラーニングバード横蔵)
- 10時~12時 小林さんより、施設案内 お話。
- 12時~14時 雪が降ってきて大変寒かった中、バーベキューを食べながら、生活学校の活動について 交流
- 14時 帰路につく。

= 小林正美さんより中山間地の地域再生のお話 =

「泣いて帰るな」と送り出された村

小林と申します。63歳、昭和24年1949年生まれ、団塊世代です。久瀬村というところで生まれました。同級生があこの山奥の村で一学年72人いました。今、久瀬小学校、1学年4人、学校の存続どうするっていうそういう減り方なんです。過密で集中している東京や大阪の大都市、他方もうどんどん人口減少して過疎化していく地方、という両方の矛盾をこの国は抱えているんじゃないかな。

私が15歳、大垣に下宿して高校行くと、親父が言った言葉が今も忘れられないんです。「町に行けば文化があって、仕事もあって経済も豊かで、いいものはい



あつく語られる 小林さん

弁護士を志して入った早稲田大学法学部時代、学生運動に携わるうち、新しい消費者運動に関心を持ち、生活協同組合の学生役員になった。54歳で早期退職し、現在はラーニングアーバー横蔵内で住み込みで働きながら、NPO活動や体験学習など幅広く参加している。(中日新聞での小林さんの紹介記事より)

っばい町にある、泣いて帰るな。」その世代みんなが、そういう言葉に、送られて町に行っただです。とにかく我慢して、歯食いしばって、町でがんばり続けて40年、50年、生きてる世代が団塊世代、だと思っています。私もそのうちの一人でした。

「人口減少の時代に」

明治の初めのころ、1880年前後、日本の人口、6000万人っていわれています。で、1990年、100年かけて1億2千300万人と、ほとんど倍になったわけです。日本の人口統計研究している機関の予測では、2100年ころの人口6000万人になってしまうと、根拠のある数字をだしています。これと、日本の成長と全く同じなんです。人口減少社会の中でどう日本がいきいけるのか、について、人口論の切り口からもっと真面目に考えなきゃいかん。

「会社の寿命」っていう本があります、明治から100年間の日本の上位100社毎年業績調べたもの、その統計でいくと会社の寿命ってせいぜい40年から50年。個人の人間の寿命っていうのもこうですね。

お母さんの胎内から、「おぎゃー」って泣いて誕生してくるわけです。で、いろんな人生があって最後は、何らかの痛みを持って泣いて死んでいく。これは避けられない宿命ですね。せめて生きている間は笑って過ごしたい。そして人生としてのピークは40プラスマイナスアルファのところ。

「生活楽校をつくったわけ」

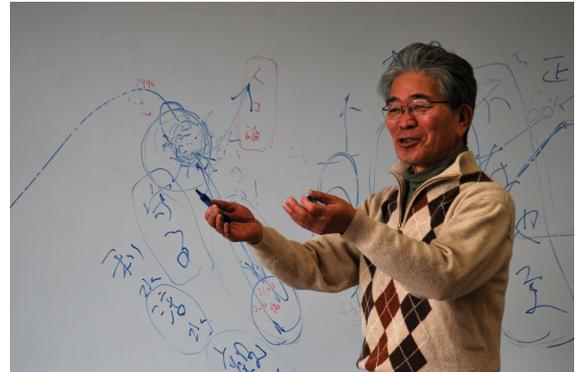
私は54歳で、大学生協35年やっていたんですが、全部退任させてもらって、Uターンでこっちに戻ってきました。なんでUターンしてわざわざこんな山奥にもどってくるのか？不思議がられる。

私は22歳で結婚して、24歳で長男が生まれて、その長男が22歳で結婚して24歳で子ども授かった。48歳で孫ができたときに、自分の子育ての責任はもう終わったと、私は自分のやりたいこと、自分の人生をかけてみたいと思ったんですね。たどり着いたのが生活の学校をやりたいと、大学生を35年後姿みてきたわけです。

今は子どもたちが非常に大切にされて過保護、だから生きる力、生活力が非常に萎えている世代です。大学生になっても洗濯機自分で動かして自分で洗濯したことがない、ご飯も炊けない、包丁が使えない。コミュニケーションできない、会話が出来ない。ちょっと壁にぶち当たるとうわーって泣いちゃう。もちろん半分くらいの子はしっかりしてますけど、半分くらいの子は社会の流れから外れて、いいのこれで、って言いたくなるような状況に置かれている。やはり親の育て方が間違っているんですね。自立して、生きる力を持った子供たちを育てないと

だめだと。義務教育の世界は任せますけど、義務教育は限界がある。社会の中で地域の中でみんなの中で、いろんな体験をして生きる力を養っていく。免疫をつくっていくことが今大事だと思います。日本中にそういう受け皿を作ればいい。子供の頃、生きる力を教えてくれたのは年上の先輩たちなんです。

自分の人生、いずれはピーク超えます。でも自分の体



力、気力が下り坂になる時期にどこで何をやっていたら私はハッピーなんだろう？考えてそれで生活楽校やりたいて決めて、10年間かけて、ラーニングアーバー横蔵 樹庵っていう組織を作ってきたわけです。60過ぎてからでは遅すぎるって思ったわけです。やはり気力、体力充実しているときにトライしないと。それと、40代、50代の主婦の人60代以降のハッピータイア組、そういう人たちの新しい生きる場所、働き場所にしたい。樹庵でいろんな小屋建てて、お店出しています。テナントで貸して、売り上げの20%、納めていただいて、それで元高校の体育の先生がそばうちやっている。アマチュアだけど、5年10年やって立派なものでおいしいです。おいしいって言うってくれるのが張り合い。収入は昔みたいには



教室だった客室



理科室が浴室



体育館

取れませんけどね。お小遣いとして5万10万の収入を得られる。60代70代で何かやりたいって言う人を引っ張り込み小さな産業をおこしたい。

「元気をつくっていくために」

先見ると人口減少っていう状態、何にもしないで去年とおなじことやっていたのでは、毎年マイナス1%減少していく。新しい努力してゼロにするか、もっと努力してプラス1%に持っていくのか、今までの時代とは違った苦勞が求められる時代ですよ。だから今日本がいる位置も、私が今人生としている位置も、同じ位置にいて、ここからどういう元気をつくっていくというのを、個人も自治体も国も考えなきゃいけない。

田舎で暮らせば金がかからない。あるもので十分、野菜やら何やらは隣近所の婆さんたちが、玄関に置いて帰っていくんでね。私ももらったものをお互い様で暮らしていけば、3万5千円で一月暮らせます。田舎暮らしは貧しいなんて思ってもらったら大間違い。田舎暮らしはけっこうリッチ、豊かなんです。それは事実です。

これからこういう村をなんとか元気にしたい。自然がいい、空気がいい、景色がいい、水がきれい、お金かからないし、仕事していても楽しい。これからの過疎地域は、もっと空き家、廃屋、使われなくなった公民館いろんな建物有効活用してリユース、それで新しい産業と文化とネットワークを作っていく必要があります。

私の田舎下の谷から流れている水なんてものすごい綺麗ですよ。充分飲料水として使えるものがあると思う。山と自然を活用して何かを興していく、もっと促進する法律こそが必要なんだ。国有林県有林困っちゃうと一般の人は入れない。何にも出来ない。どんどん廃れていく。思わぬ悪循環、活用して使ってこそ最高。

不在地主がこの辺の山の共有林以外の民有林の60%所有しています。手入れしてない人工林、実がなら

ないから、餌が無い狸も狐も鹿も猪も里に降りてくるんです。本当に山をやりたいという森林ボランティア一杯いますよ。やる気のある真面目な森林所有者を育てていかないとだめだ、今その発想の転換をしていかないと山はどんどん荒れていきます。

樹木葬、団塊世



生ハムづくりの方より

代中心にして話題になっています。自分が眠りたい場所自分で決めて生前予約しておく。お寺っていうのは地域のコミュニティセンターの再生としてもう一度よみがえらせなきゃいけないと思っているので、お寺の存続にも役に立つ。お寺のお坊さんと村の人たちが、墓地公園みたいにしてそこを綺麗に芝生を張って手入れしてもらおう。管理運営して村人も仕事になるわけです。そして都会の人が半分旅行もかねてお墓参りもする。こんな風に過疎地域の活性化策、元気になる方法をやっていけば、中山間地だっていろんな可能性がある。こんなことを生活楽校の会員と役員とその他のNPO団体と話しています。

10年先50年先どうなるか...危機感を持つ、持ったら共有化してこうならないために、こうするにはどうするのか、国に対して自治体に対して、してくれないって言うっていたってもうあかん。自分たちが何をやるか、自分と自分たちで自立と協同、を育てていかないと。

協同とか自立とかそういう世界が大変求められている。



ホール



レストラン樹庵

(そば処樹庵もあります。HPより)



バーベキューサイト(50名まで HPより)

第4回岐阜のつどい 岐阜を知ろう!つなごう!報告 文責 事務局:井貝淳子 楽しく集落づくりをしている「和良を学ぼう!!」

岐阜を知ろう!つなごう!をテーマに、4月21日 第4回岐阜のつどい「楽しく集落づくりをしている和良を学ぼう!!」を行いました。 愛知・岐阜・三重3県から18名参加。和良を楽学び、味わい 満喫してきました。



4月21日 第4回 岐阜つどい スケジュール
和良おこし協議会の活動を事務局小林さんよりうかがう。オオサンショウウオにもご対面。
和良歴史資料館見学。
お食事どころ「なかささん」へ移動、昼食 和良鮎、ほう葉ずし、豆腐ステーキと山芋の鉄板焼き
方須地区のおまつり見学、戸隠神社(一本杉・重ね岩)



方須地区 おまつり 見学 神楽の奉納

昼食 和良鮎 ほう葉ずし 豆腐ステーキと山芋の鉄板焼き

事務局小林さんより

和良を元気にするために、「和良おこし協議会」として取り組んできた3つの事、「田んぼオーナー制度、和良鮎のブランド化、「T型集落点検」について詳しく話していただいた。

- * 「田んぼオーナー制度」オーナーを集い、農業体験をしながら減農薬米のオーナーになる制度。田んぼを購入せず米の生産が体験出来、生産者が見える安心で上質なお米が買える。大まかな作業は専業農家が行う為失敗がなく、農業体験は年に4回のイベントとして行われ、同時に地元の文化や食の交流も行われる。年会費2万円で、60キログラムの減農薬玄米が手に入り、農業体験という好条件で、遠く滋賀県からも参加されている。
- * 「T型集落点検」とは「集落の人に公民館に集まってもらい、住民は自分たちで模造紙に地図を書き、そこに同居している家族の性別、年齢、続柄、できれば職業もすべて書き込んでいきます。次に、都市など他所に出て行っている子どもや孫も、どこに住んでいるのかまで書き込み、(略)同居している子どもだけではなく、他出している子どもでも、誰が農業を継げるのか、暮らしの基本である家族の将来像を見据えて、集落の将来計画を立てていく方法」この集落点検作業を通じて「自分たちで何かやろう」という機運が盛り上がり、さまざまな活動 - フリーマーケットや芋煮会、蛍を見る会、休耕田で蕎麦を作る会 - がはじまっている。

参加者から

(和良について)それなりに知っているつもりでしたが、今回はまた新しい発見がありました。神楽のある村祭りの見学です。あのようなゆったりした時間のながれと神あるいは伝統という核を内包している空間のひろがり・・・分刻みの時間に追われる生活を強いられていた身にはなんととも贅沢な経験でした。それに和良鮎は冷凍もので少し残念でしたが、今度は是非生で食べたいものです。

「岐阜地域懇談会 第5回 岐阜のつどい」

地域を元気にしようがんばっている

「やまがた」の若者と元気なお母さんたちと交流しました

11月5日(火)に第5回岐阜のつどい「地域を元気にしようがんばっている「やまがた」の若者と元気なお母さんたちと交流しよう」を開催しました。「やまがた」といっても東北ではありません。関市と本巣市の山間の町、神崎集落を中心とした山県北部です。神崎川は今まで見たこともないほどきれいな川でした。神崎川をさかのぼっていくと、あらわれたのがつどいの目的地、旧北山小学校、その校内にあるのが、北山農家レストラン「舟伏の里へおんせえよ〜」です。自分の住んでいる地域を大切に、これからもこの地域での暮らしを残していきたいと考える地元出身の集落支援員横山さん(伊自良)、山口さん(北山)、都会からやってこられた地域おこし協力隊の中村さん 若者3人の、熱い思いをお聞きし、農家レストランの運営に携わっておられる元気な北山のお母さんたちと楽しく交流ができました。

文責：事務局



集落支援員の3人からお話を聞く



農家レストランの「花かご」



元気なお母さんと、和やかに交流

横山さん、山口さん二人とも一度はこの地域から離れたのですが、さまざまな経験の中で、自分の生まれた地域のくらしの素晴らしさに気づき(自然、人 伝承文化 農業の大切さ...)ユーターン。その良さを広く皆さんに知っていただくためにさまざまな活動をはじめられました。その一つとして生まれたのが農家レストランです。中村さんは、料理の専門家としてレストランの運営の指導にあたっておられます。

その活動のようすから参加されたみなさんの楽しさ・余裕が伝わってきます。無農薬稲作にチャレンジ、いろいろの事情がかさなって半分はシカのエサになってしまった、このシカを食べないといけなのではないかとか、婚活イベントを企画、伴侶は見つけれなかったけれど、そのイベントに参加された男性がいろいろな地域おこしのイベントにも参加されるようになり、地元の良さに気付かれたとか、どのエピソードも豊かな暮らしとはいったい何だろうと私たちに考えさせられる示唆に富んだものでした。

昼食後、レストランスタッフのお母さんたちからうかがったお話は、聞いているだけで元気が出てきます。「昔のことと思ったら今は幸せ、楽しい」くらし、新聞配達の人が来る前に雪をかいておいてあげるのは常識。裏に行けば野菜あるから何にも困らない。雨降ったら留守の隣の家の洗濯物入れてあげるのが当たり前、時には、うつつうしいぐらいの絆、(孤独死なんてありえない)ちょっと前まで結婚式は3日3晩続いて酒の席でのもめごとは当たり前、最近みんなおとなしくなった・・・この3人の若者よく頑張っていて可愛い、中村さんから料理の盛り付けの指導をうけたが、量が少ない、イモとか私はもっと盛ってあげたい。やまがたのお母さんたちどの方も魅力的でした。

若者たちの仕事は期限付きです。行政からの補助がなくなったあと、どのように生業としての仕事をこの地におこせるか。難問は控えています、彼らなら、何とかしていける・・・また、私たちは何か応援したいと強く思いました。